

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

No.74 2023. 9. 1

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5

(株)国際文献社

TEL: 03-6824-9370

理事長・各委員会委員長からの挨拶と お知らせ

《理事長》

理事長就任にあたって

笠井 仁（静岡大学）

このたび、再度、理事長の任を担うことになりました。日本催眠医学心理学会は、1956年10月15日に催眠研究会として発足し、1963年11月17日に日本催眠医学心理学会と改称して今日に至っている、わが国の催眠に関する学術団体の中でも長い歴史をもつ学会です。その伝統を途絶えさせることなく次の世代に引き継いでいくことを使命感に感じ、身の引き締まる思いしております。

催眠は、何よりも意識体験や心身の変化をともなう自然な現象です。この現象を理解するために多くの研究が行われ、さまざまな理論アプローチが発表されてきました。そして、この現象を多岐にわたる心身の問題に適用して、改善に寄与する試みも重ねられてきました。近年では、神経科学の観点から催眠の本態をとらえようとする知見も種々明らかにされてきています。日本催眠医学心理学会は、このような催眠の基礎から応用に至るまで、幅広い研究と実践の領域を扱う学術団体です。会員の皆さんと催眠が本来もつ不思議さ、面白さ、豊饒さを共有しながら、ともに技術を高め、工夫を凝らし、理解を深めていきたいと考えております。

コロナ禍は対人接触の機会を奪い、世の中のさまざまな機能を停滞させてしまいました。多くの貴重な人命を奪い去ったことも悲しいできごとです。一方で、直接対面しないオンラインの形でのコミュニケーションの仕方が進展し、距離の制約を受けずに遠方、場合によっては海外との交流も容易になりました。催眠の研究と実践にとって、そのプラス面、マイナス面の吟味も必要になるでしょうが、多様な学びと交流の機会を得ることもまた

可能であることがわかりました。紙媒体だけが情報伝達の手段でもなくなってきました。学会としても、さまざまなフォーマットで会員の皆さんへのサービスの提供を考えていきたいと思っております。

ひところは500名を超える会員数を誇っていた本学会も、現在では正会員、準会員合わせて350名余りまで会員数は減少しています。世知辛いことを言えば、学会運営の基盤は会員からの会費収入によって成り立っています。催眠という現象の理解と応用が少しでも多くの専門家の関心を引いて、会員としてともに活動できる工夫も考えていきたいと思っております。何よりも、自由に、自発的に、研究と実践を検討する場を確保することは学会の使命です。会員の皆さんからのご支援とご協力を伏してお願ひ申し上げます。

《編集委員会》

編集委員長就任の挨拶とお願い

小泉晋一（共栄大学）

本学会の体制が変わり、新しく編集委員長に就任しました。前委員長の長谷川先生の方針を引き継いで、学会誌『催眠学研究』を年に1冊は発刊するつもりです。一時期、学会誌の発刊が滞っていた時期がありますので、しばらくは合併号の発刊となりますことをご了承ください。

学会誌の内容としては、大会シンポジウムや大会講演の録音をテープ起こしして原稿化したものがメインになっています。2023年度内に刊行予定の第62巻・第63巻合併号では、本学会第64回大会と第65回大会の特集を組む予定です。2022年度の大会が第68回大会ですので少し遅れていますが、来年度には第66回大会と第67回大会の特集を組みます。再来年度が第68回大会と第69回大会の特集です。そんな感じで私の任期中に大会の年度と学会誌刊行の年度とが少しでも合致するように

したいと考えています。

確かに大会シンポジウムの内容を記録として残しておくことは重要なことではありますが、やはり学会の機関誌ですので、できたら投稿論文を掲載したいと考えています。1990年代まではそれなりに投稿論文がありましたが、2000年代になって減りはじめ、2010年以降は論文の投稿そのもののがかなり稀になりました。学会の活性化には投稿論文が不可欠で、投稿論文の多寡は活性化のバロメーターでもあると思います。そこで皆様にお願ひがあります。ぜひ論文を投稿してください。

論文は事例研究でも実験・調査研究のどちらでもかまいません。原稿をいただきましたら、できるだけ早く、遅くとも3か月以内には査読結果の通知をするようにいたします。投稿先は下記の住所（編集局）までお送りください。電子メールを介した電子媒体での投稿をご希望の場合は、予め編集局までお知らせください。皆様の投稿をお待ちしております。

【編集局連絡先】

（住所）〒344-0051 埼玉県春日部市内牧4158

共栄大学教育学部

小泉研究室内『催眠学研究』編集局

小泉晋一

（電話）048-755-2962（直通）

（電子メール）koizumi@kyoei.ac.jp

《広報委員会》

広報委員長就任にあたり

広報委員長 鈴木義也

前期の資格関連は委員として引き続き関わらせていただきますが、新たに広報委員長を拝命致しました。

広報委員会とはホームページとニュースレターという媒体を通して学会を発信していくものです。

ホームページの訂正を一つ一つ業者さんをお願いしている状況なので、これを素人のできる範囲で広報委員が直接訂正できるようにならないのかと検討しています。

まさに今、皆様が目を通しておられるこのニュースレターですが、これについては大きな変更が理事会で承認されました。

一つはニュースレターをデジタル化して発行するということです。会員の元にはメールにpdf添付で送信されます。このことで資源を無駄にしないペーパーレスで、印刷、封書、郵送代を節約することができ、おそらく環境に優しくなるかと思ひます。

もう一つは、ニュースレターを会員だけのためのものとする事です。現状ではニュースレターのアーカイブはホームページにあり、誰でも閲覧できる状態です。これを会員専用ページに移して会員しか見られないようにします。メールで送付されるニュースレターをなくしても会員ならアーカイブがあるので安心です。

ニュースレターを会員限定にする理由は3つあります。

- ①ニュースレターを会員特典にしたい。わざわざ会費を払っていただいているメリットを増やすために行います。
- ②ニュースレターは旬のものなので、時期が過ぎると歴史的価値しなくなるものなので、わざわざ常時ホームページに掲載する意義は薄いと考えました。
- ③個人情報のため。ニュースレターには倫理的に守秘義務に抵触する内容は掲載されません。そこが学会誌とは異なるところです。とはいえ、誰がどうしたとかという個人の動向は多く掲載されています。倫理的には問題ないとしても、ちょっと個人情報は控え目にするのが昨今の流れなのでそうする所存です。私のこの文章も、あくまで会員の方に向けて書いているつもりで、世界に向けてインターネットで発信されてしまうという従来のホームページ掲載には違和感がありました。

このようなわけなのですが、実際のデジタル送信化については技術的な問題が未着手であり、難易度が高ければ次号からというわけにはまいりませんので、どうか気を長くしてお待ちいただきますようお願いいたします。

現代では、学会からの一方的な発信だけではなく、ホームページを通じて会員との双方向的なやり取りや質問なども、それこそ会員特典としてできたらいいなと想像したりするのですが、何しろ余力なく現状の修正に留まっている次第です。

それでも、ホームページをこうしたらいいとか、学会の広報をもっとこうしたらいいなどありましたら忌憚ないご意見とアイデアをお寄せください。

《企画・研修委員会》

企画・研修委員会委員長就任にあたって

鈴木常元（駒澤大学）

今期より企画・教育委員会の委員長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願ひいたします。

前期は、飯森前理事長のもとで、小泉前委員長を中心に、研修会の充実を図ってきました。従来から行われていた学会の大会時に行われる技法研修会に加えて、大会

時とは別に独立の研修会がLemke, W. 先生や大谷彰先生を招いて開催されました。これを引き継いで、笠井新理事長のもと、一層の充実を図っていきたいと思いますが、まずは学会運営の中で、この独立の研修会をどのように位置づけ、軌道に乗せていくかが、今期の重要な課題のひとつであると認識しております。研修会は学会員の催眠技能の向上だけでなく、非学会員の方々にも催眠について関心を持ってもらったり、理解してもらったりするための機会にもなっています。また、この機会に得られた収益も学会員に還元されています。もちろん、収益が第一の目的ではありませんが、堅実な計画のもと、会員の皆様に有益となる研修会を開催していきたいと思っております。

催眠を習得するにあたって、まずは基本的な催眠誘導の技法を覚える必要があるかと思っております。ここまでは誰でもある程度は習得することができるかと思っておりますが、そこから次のステップ、つまり実際のクライアントに対して、どのように催眠を用いたらよいかを習得することのハードルが少し高くなっているように思っております。先日、それなりに臨床歴も持ちで、催眠誘導についてもある程度は学んだが臨床では催眠を用いたことがないという非学会員の方と話す機会がありました。その際、私自身が行った拙い事例について話したところ、「ああ、催眠でそういう風に使うんですね」と言われました。催眠技法をどのように治療法として応用していくかが、まだまだ浸透していないことを痛感し、そのための考え方や技術を如何に伝えていけるかが重要だと強く感じました。

研修会は非会員の方に催眠について知ってもらうよい機会にはなっていますが、何よりも会員のためのものがあります。ですから、なるべく会員の皆様のニーズに応えられるような研修会を開催したいと思います。そのためには、学会宛、研修委員会宛にご要望をいただくことが最も効率的かと思っております。ぜひご要望をお聞かせください。

今後の学会の発展と会員の皆様の技術の向上に向けて、努めてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

《研究委員会》

催眠研究のさらなる活性化を願って

研究委員長 松木 繁

この度、学会の研究委員長を拝命しました松木繁です。昨年度に続き今期も研究委員会を任されました。よろしくお願致します。

研究委員会は、催眠研究実績をお持ちの、大学通り武

蔵野催眠クリニック院長川嶋新二先生、愛知医科大学疼痛医学講座 水谷みゆき先生、横浜市こころの健康相談センター 片山宗紀先生を委嘱理事としてご協力を頂き、催眠研究の活性化に向けて尽力したいと考えています。

現状での研究委員会の主な仕事は、催眠研究に対する助成制度の活用との推進と、学会大会時での優秀な発表に対する「ベストプレゼンテーション賞」の選出です。

研究助成に関しては、日々の臨床実践の効果研究と脳科学研究を含めた基礎研究を活性化させ両者を架橋する新たな催眠研究のパラダイム構築を図りたいと考えています。特に、その治療ガイダンスにおいて推奨されていた慢性疼痛、機能的ディスペシアへの催眠療法の効果研究についてさらなる研究を深めて欲しいと考えています。その研究をより説得力のあるものにするためには、Mak.P.Jensen博士が学会誌第58巻に投稿され提唱された「生物・心理・社会モデルに基づく催眠のメカニズム解明」(水谷みゆき先生訳)が大きな力になるものと考えています。

脳科学研究においては、国際学会でも話題になった「(催眠状態における)脳の神経可塑性」についての研究、及び、催眠カタレプシー状態の脳科学研究とその臨床応用などが推進されると良いなと期待しています。医学・心理学の協働による実験研究が望まれるところですので、関係会員の積極的な参加を期待しています。

一方、世界の催眠研究やその定義づけにおいても話題にあがっている「自発的催眠」も非常に興味深いテーマです。笠井理事長も強く関心を示されているようですし、日本臨床催眠学会誌において展望論文として片山宗紀先生が世界情勢について海外文献の紹介をもとに上梓されています。次世代の催眠研究は、その定義づけにおいてこの視点も含めて整理されていくことが予想されますので、世界に先駆けて日本から発信できると良いなと考えています。

本学会には研究助成制度がありますので会員の皆さまの積極的な活用を願っています。その手続きは学会HPに掲載されていますので是非ご覧下さい。よろしくお願致します。

《国際交流委員会》

国際交流委員会委員長に就任して

委員長 藤岡孝志 (日本社会事業大学)

前期に引き続き、今期、国際交流委員会委員長に就任いたしました。よろしくお願いたします。国際交流委員会の役割は多岐にわたり、また、海外の研究・臨床の動向を踏まえ、日本における催眠研究及び催眠臨床の発

展の一翼を担う重要な委員会と認識しています。これまでも学会誌に海外の催眠論文を翻訳要約し掲載されるなど、会員の皆様に海外の催眠研究の動向を提供していただけてきましたが、コロナ禍での国際交流が抑制される中、十分な活動ができなかったと思っております。今後も、これまでの国際交流委員会活動内容を継続していく所存です。加えて、コロナ禍の今後を見据えて、海外渡航あるいは来日いただいで対面による交流だけではなく、Zoom等オンラインによる海外の研究者・臨床者との交流も今後ますます重要となってくるものと考えております。企画等検討する所存です。

また、国際大会のご案内も折にふれて行ってきました。COVID-19パンデミックの影響により、2021年開催予定であった国際催眠学会 (the International Society of Hypnosis: ISH) 第22回国際会議ポーランド・クラクフ大会の開催が2022年6月8日から6月11日までに延期され、さらに、コロナ禍の影響で、2024年6月12日から15日に延期になりました。開催地は、同じポーランド・クラクフです。国際会議参加登録等できます。

<https://www.ishypnosis.org/krakow-2024/>

来年こそ、会員の皆様とともに、国際大会に参加できることを楽しみにしております。

コロナ禍後の新しい日常としての国際交流のあり方も模索していく所存です。会員の皆様のご意見をおうかがいすることができれば幸いです。

国際交流委員会委員長への就任に際し、国際大会のご案内も併せてさせていただきました。学会員の方々、新たに構成された委員の方々のご協力もいただきながら、本学会の国際交流の活性化に微力ながら尽力できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

《倫理委員会》

倫理委員長就任にあたって

倫理委員長 築島 健

今季の倫理委員会は委員の確定がなかなかできずにいて少し遅れて発足しました。顔ぶれは以下の通りです。

委員長 築島 健 (美唄すずらんクリニック)

委員 加納友子 (立命館大学) 鶴光代 (東京福祉大学) 石井広志 (石井歯科医院)

今期の活動は、以下を予定しています。

- 1) 倫理案件の処理を円滑に進めるための諸規定の(見直しを含む)検討

直接会って、検討協議することがいささか困難なご時世ですけれど、できる限りのことはやって参りたいと考えております。

《資格認定委員会》

委員長就任にあたって

窪田文子 (医療創生大学)

今期、資格認定委員会の委員長を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。資格認定委員会は10年以上前に1度、関わらせていただきました。その時は、大野清志先生が委員長でいらしゃって、大野先生の下で、資格認定手続きの事務的なお手伝いをさせていただきました。今回、久しぶりに資格認定委員会にかかわらせていただくことになりました。しかも、委員長という役割ですので、とても責任を感じています。

資格認定委員会は、本学会で出している資格の認定業務にあたるのが役割と考えます。本学会では、「認定催眠士」と「指導催眠士」の資格を出しています。「認定催眠士」は、催眠法を適正に用いる知識と経験及び技能を有すると認められた者に与えられ、「指導催眠士」は、催眠法を学ぶ者に対して適切な指導・助言を提供する能力があると認められた者に与えられます。調べてみましたら、本学会でこの資格制度が始まったのは1988年のようです。臨床心理士の認定が始まったのと同じ年になります。すでに30年に及ぶ歴史があります。資格制度というのは、その専門領域に関して一定の知識と技能の水準を持つことを証明するものであり、養成プログラムや倫理綱領、専門誌の発行などと並んで、専門職に必要な要素として挙げられています。資格は、その資格を持つ者が、一定の専門的な知識と技能を持ち、それらの専門的な知識とスキルを対象者の福祉のために役立てるといふ倫理的な姿勢を備えていることを保証することになるでしょう。それと同時に、社会的には、その専門的な業務を責任を持って実施し、社会の中にその役割を位置付ける意味を持つものであると考えます。

委員長をお引き受けするにあたり、まずは、規約等で資格認定委員会の役割についてしっかりと認識し、適正に委員会の業務を進めてまいりたいと考えています。そして、会員の皆様には、催眠の専門家としての責任と誇りをもって、催眠研究及び臨床実践に携わっていただくために、資格の取得をご検討いただけますよう、お願ひ申し上げます。

《事務局》

事務局長（会務）就任にあたって

田村英恵（立正大学）

この度、日本催眠医学心理学会事務局を担当させていただくことになりました。

催眠研究会として1956年に発足した本学会は、今年で67年を迎えました。伝統ある学会の運営の一端を担う役割をいただきましたが、以前にも事務局を担当しておりましたので、再度の就任となります。改めて身の引き締まる思いがしています。

私が初めて日本催眠医学心理学会の年次大会に参加させていただいたのは、第44回大会でした。研究発表後、大学院生であった私に様々な先生方が気さくに声をかけてくださり、催眠やイメージや暗示に関する大変貴重なご示唆をいただきました。高名な先生方を目の前に大変な緊張感を味わいながらも、催眠や催眠研究を語る際の先生方の目の輝きや熱心さにおおいに刺激を受け、催眠の面白さを知ることが出来ました。

その後、イメージや暗示に関する研究を続ける一方で、催眠の研修会やワークショップなどに出席してまいりました。催眠の研究もちろんですが、催眠の体験では毎回新しい発見があり、体験を重ねれば重ねるほど面白いという感覚は強くなり、催眠のもつ奥深さと魅力には今でもまだ驚かされます。

また、臨床の現場でも催眠やイメージを用いた際の展開の豊かさに驚かされることが多いのですが、クライアントが今感じていること、クライアントとの関係性、面接（空間）で生じていること等、催眠を身につけているからこそ見えてくるものもまた多いと感じています。それは、面接を展開させるための大きなヒントになっています。

催眠研究や実践研究が活発かつ円滑に行われ、また催眠の面白さが学会の外にも広く伝わることで本学会がさらに発展できるように、微力ではありますが尽力していきたいと考えております。至らぬ点多々あるかと思いますが、学会運営や学会の在り方について忌憚のないご意見をいただけると幸いです。ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第68回大会長報告（大会を終えて）

藤岡孝志（日本社会事業大学 名誉教授）

第68回大会は、2022年12月10日(土)、11日(日)と二日間にわたって、東洋学園大学を会場として行われました。

大会参加者48名、研修会参加者43名（初級22名、中級12名、上級9名）でした。コロナの終息が見えはじめた時期とはいえ、まだまだ懸念がある中ではありましたが、会員の皆様のご理解のもと、対面での大会そして対面での研修会を開催できたことを心から感謝申し上げます。

今大会のテーマは、『原点回帰』—催眠の実験と臨床を振り返り、「身体」と「支援者支援」へとつなげる—といたしました。

そのテーマの概要です。「催眠は、多くの臨床技法と臨床的な概念を精選し、構築してきました。多くの先達たちが見てきた催眠現象の実験的解明と臨床的な適用は、時代とともに、大きな変遷を経て、発展してきました。催眠から離れようが、寄り添い続けようが、また、傍から催眠を見続けようが、その魅力は色褪せることはありません。多くの先人たちが見てきた催眠の世界、特に19世紀の催眠隆盛の時代に何が人々を魅了したのか、我々はまた十分にはとらえきれていないと考えます。『原点回帰』とは、同じ人としての営みとして繰り広げられた催眠の世界、その景色をもう一度見ることで、我々が見過ごしてきたこと、あるいは忘れてしまっていたことを再度発掘することができるのではと考えます。」

その趣旨のもと、3つのシンポジウムを企画しました。シンポジウム1では、ジャネを取り上げました。お願いした方々は以下の通りです（敬称略）。大会シンポジウム1 催眠の歴史を掘り下げる—ジャネを中心に

して一。シンポジスト 川嶋 新二 Pierre Janetの感情論へのいざない、田母神 顯二郎 ジャネの臨床の意義をとらえ直す、藤岡 孝志 ジャネ臨床—ジャネの技法をとらえ直す—、司会：小泉 晋一。そして、今大会では、その原点から眺める眼差しを、特に今回は、「身体」と「支援者支援」へと向けていこうと考えました。

支援者にとってもクライアントにとっても、最も身近な臨床的な場として、豊穡なる世界を有する「身体」に注目し、その臨床的な可能性について、改めて、原点から問い直します。お願いした方々は以下の方々でした（敬称略）。大会シンポジウム2 催眠を身体から掘り下げ—認知科学と臨床のコラボ—。シンポジスト 今福 理博 内受容感覚と対人認知、森山 剛 動作法のコンピュータ画像解析、宮 海彦 元シルク・ド・ソレイユ パフォーマー からだの動きと気づき、司会：深沢 孝之。

また、改めて、催眠現象における「支援者」を掘り下げ、「支援者支援は、クライアント支援」とのテーマを今一度催眠臨床から問い直しました。お願いしたのは以下の方々でした（敬称略）。大会シンポジウム3 催眠を支援者支援から掘り下げ—支援者支援と催眠—。シンポジスト 岡本 浩一 セルフケアとしてのNLP、坐禅、茶道点前、桜井 憲児朗 支援者支援への瞑想と催眠の活用、梅崎 薫 支援者も被支援者とともに—修復的対話サークルでの癒し—、司会：高橋 国法。

いずれのシンポジウムも示唆に富み、活発な議論が行われました。この機会に改めて催眠の持つ可能性について議論を深めることができました。また、研究発表も会場を一つにすることで、参加者全員で発表者の最新の研究発表について議論し、会場からはたくさんの質問やコメントをいただくことができました。

本大会では、三年にもなるコロナ禍があったからこそ得られた体験と知見を、多くの学会員とともに共有しあい、そこから大いなる知的刺激をえて、日頃の臨床と学問的展開を語り合える有意義な時間となったと考えています。

会場にお越しいただきました大会参加者の方々、お忙しい中シンポジストとして大会を盛り上げていただきましたの方々、研修会の講師をお願いしたの方々、研修会で研鑽を積まれたの方々、本大会の協賛をいただきかつ会場にて書籍販売の労を取ってくださった出版社の方々等、皆様に心からお礼を申し上げて、大会の報告とさせていただきます。また、最後になりましたが、素晴らしい会場を使用させていただきました東洋学園大学の関係者の皆様、長きにわたる大会開催に向けての準備及び当日の運営を共に進めていただきました実行委員会の方々、お手伝いいただいた学生の皆さんに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

日本催眠医学心理学会 第68回大会・研修会に参加して

藤本太陽（福山平成大学）

令和4年12月上旬に東洋学園大学にて開催された日本催眠医学心理学会第68回大会、研修会に参加しましたので、その概要と感想についてご報告致します。

私は現在、広島県福山市にある福山平成大学という大学に務める傍ら、競技者の競技力向上を目的とした心理サポートを行っております。今回の学会大会に参加させて頂いたのも、自身の研究や心理サポートの幅を広げることを目的に参加させて頂きました。

私の催眠との関わりについては、日本体育大学の大学院生の時になります。所属していた研究室は、長年、催眠を用いて競技者の競技力向上に尽力されてきた、長田

一臣先生（名誉教授）、楠本恭久先生（名誉教授）の研究室であったため、先生方の研究やサポート事例に触れていく中で、次第に催眠に興味を持つようになりました。そうした中、催眠について更に深く学びたいと思い、催眠医学心理学会に入会させて頂き、第61回大会から参加させて頂いております。本学会は毎回様々な企画や研修会が準備され、催眠を深く学ぶことは勿論のこと、大会を通して多くの学びが得られる貴重な学会であると感じており、毎回楽しみに参加させて頂いております。

さて、今大会は基調講演から大会シンポジウム、催眠技法研修会（初級コース）に参加させて頂きました。

まず、基調講演、大会シンポジウムでは、「原点回帰」をテーマとし、今日に至る催眠の世界を、ジャネの原点に立ち返って「ジャネが見た景色」から問い直すという企画が設けられておりました。そこでは、ジャネを中心とした催眠の歴史や感情論、臨床の意義、技法をテーマに議論が展開され、ジャネがどのように催眠を捉え、臨

床へ活用されてきたのかということや、催眠から様々な臨床技法が生み出され、活用されているということを学ばせて頂き、改めて、催眠の可能性や重要性に気付かされました。続く、もう一つのシンポジウムでは「身体」というテーマで認知科学や工学、プロパフォーマーの先生方から身体への注意や動作、身体への気づきなどについて議論が展開され、その内容はいずれも刺激的で大変学びが深く、催眠の基礎研究や臨床に新たな気づきをもたらしてくれるものとなりました。

次に、催眠技法研修会（初級コース）では、講義と実習を行いました。実習では3人1組になり、「腕下降と腕浮揚」「凝視法」「腕浮揚法」を行いました。初めは誘導がうまくいくか不安を感じていたのですが、講師の先生方が常に私達をサポートして頂いたことから、徐々に不安を乗り越えて実施することができました。研修会を通して、催眠者、被催眠者それぞれの感じ方やその二者間で生じる現象を体験することができ、大変貴重な経験となりました。今後も資格の取得も目指して学会に参加させて頂きたいと思います。

最後に、本大会の準備、運営を行って頂いた大会運営委員の先生方、学生の皆さんの対応はとても行き届いたものであり、気持ちよく2日間の大会期間を過ごすことができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

対面での研修会（中級コース）に参加して

小鹿 学

（山梨大学医学部附属病院新生児集中治療部）

私は普段小児科医として心の問題を抱えた子どもたちに関わっています。トラウマ治療の勉強の過程で自我状態療法を通して、催眠の奥深さに気づかされました。催眠については何の知識もありませんでしたが、ふと催眠との初めての出会いは、自分自身が幼児期に夜尿治療の

催眠療法を受けたことだと思い出しました。その時の部屋の様子や雰囲気と、腕浮揚で確かに右腕が上がったことを鮮明に記憶しています。幼児期の出来事をそれだけはっきりと記憶しているということは、自分にとってよほど印象的な出来事だったのだと思いますし、当時は催眠が身近にあったのだとあらためて思いました。

はじめての催眠研修としては本学会の令和4年2月に初級コースを受講しました。コロナ禍のためオンラインでの研修でしたので、残念ながらお互いに実習することが叶いませんでした。その後、成瀬先生の「催眠面接法」の中の標準催眠尺度提要を使って同僚に試したりしましたが、自己流のためうまくいったりいかなかったりと悶々としていました。今回本大会中に中級コースがあると知り、全くの素人ながら真っ先に応募させていただき、非常に貴重な体験をすることができました。対面研修ではベテランの先生方からどうしてうまくいかないのかへのフィードバックをもらえたり、生身の人間の反応に合わせた声かけや、観察したりといった共同作業が非常に重要であることを痛感させられました。さらに自分が被験者になった時に、実際にどのように感じられるのか、どう誘導されると効果的なのかを実感として体験できました。やはり催眠は対面研修が一番効果的であると思いました。数々の著名な方々が催眠の可能性に魅了された理由がよくわかります。

実際の臨床ではまだまだ活用できてはいませんが、先日いじめにより学校に行くと考えただけで過換気になってしまう子どもに試したところ、呼吸を自分でコントロールできるようになったと言ってくれました。真に催眠の効果だったかどうかはわかりませんが、これからは尻込みせず実践していこうと思っています。そのためには今回のような対面研修や勉強の機会がたくさんあると嬉しいです。可能な限り参加して実際の臨床に生かしていきたいと思っています。

日本催眠医学心理学会第69回大会のお知らせ

大会長 田辺 肇（静岡大学）

第69回大会を2023年12月2日(土)から3日(日)の2日間、明治大学駿河台キャンパス（お茶の水・神保町）で開催します。昨年に引き続き、東京での開催となりますが、アクセスも良い会場かと思しますので、是非多くの方にご参加戴きたく存じます。まずは日程のご確認をお願いします。

大会のテーマは「催眠における多様性と交流」としました。昨年のテーマである『原点回帰』を承けて、学術大会が、さまざまな立場や領域の間の知見の交換や出会いなどいろいろな意味での交流を通し、催眠の研究と実践における多

様性の醸成につながればという願いを込めました。もとより、催眠はその理論的な背景から実践のあり方まで、多様性に満ちており、いろいろな水準で異種混合的なものであることをふまえておくべき主題かと思えます。おそらくそのことが、多様な理論や実践を生み出す母体としての可能性を醸成したのではないかと想像しております。

大会講演として、認知科学、VR、メディアアートなど多様な領域を横断して活躍されている小鷹研理先生にご講演を頂けるよう交渉しております。先生が焦点をあてているミニマルセルフの問題は、催眠や解離の体験過程の理解において、重要な切り口であると言えるでしょう。

シンポジウムとして、昨年に引き続きジャネに関連した話題を採り上げる計画です。催眠を中心に据えつつ、解離やトラウマなどの問題にも議論が展開するかと思えます。ジャネを採り上げることは、歴史的・人文的な切り口と実証科学的な視点の疎通、多様な実践やモデルとの出会いの機会に繋がるものと思っています。

未だにCovid-19の状況は楽観視できないところがありますが、対面による社会的交流の意義についても一定のコンセンサスが得られていることと思えます。今回は、初日の夜に、対面による懇親会を企画しております。理知的な議論との両輪として、いろいろの交流の機会となればと考えています。今回は、講演やシンポジウム前になりますので、アイスブレイクとしては是非ご参加下さい。

そして、研究発表は学術大会の重要な柱です。発表者の方のご負担を気持ちだけでも減らすべく、抄録集原稿作成用のひな形Wordファイルを用意します。例年通り抄録本文は1400字程度となります(図表含む)。今回は倫理委員会審査等倫理的配慮にかかる必要事項を本文に明記戴くことにしました。また、抄録集原稿はpdfにて大会参加者に配付されますので、事例-症例研究の場合、記載方法に特にご配慮ください。皆様の研究成果をご発表戴きたく、執筆準備のほどよろしくご検討ください。

大会概要

会 期 2023年12月2日(土)~3日(日)

会 場 明治大学駿河台キャンパス (お茶の水・神保町)

テーマ 催眠における多様性と交流

日 程 2日(土): 催眠技法研修会、口頭発表 [事例-症例研究] (予定)、懇親会

3日(日): 大会講演、シンポジウム、総会、口頭発表

追記: 本大会でも、会員の方に大会抄録集への広告掲載をお願いすることにしました。ご自身の関係する医療・相談機関や出版された著作の広告をお寄せください。会員に告知され、相互の交流となることを期待しております。

////////// 編集後記 //////////////////////////////////////

再び広報委員として役割を担うこととなりました。日本催眠医学心理学会の諸活動や動向を会員に知って頂くためのニューズレターを久しぶりに編集・発行しています。2023年度から新体制が始動したこともあり、大会の体験記などいち早く原稿を頂いた先生には発行が遅くなってしまって申し訳ございませんでした。

webやSNSといったインターネットの媒体での情報が素早いのですが流れるように情報が上書きされる感じがあること比べてニューズレターは書類やファイルとして「まとまり」が届き、手元でじっくりと確認できる良さがあると思えます。この良さを活かした編集を心掛けたいです。印刷物での発行は今回が最後となる予定のようです。

12月に学会が開催されるので対面でお目にかかれることをお互いに喜び合いたいです。(広報委員 長谷川明弘)
